

研究・調査報告書

報告書番号	担当
5 8	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳) Wine and other alcohol consumption and risk of ovarian cancer in the California Teachers Study cohort. ワイン及びその他のアルコール摂取と卵巣癌の危険性の関連	
執筆者 Chang ET, Canchola AJ, Lee VS, Clarke CA, Purdie DM, Reynolds P, Bernstein L, Stram DO, Anton-Culver H, Deapen D, Mohrenweiser H, Peel D, Pinder R, Ross RK, West DW, Wright W, Ziogas A, Horn-Ross PL.	
掲載誌 (番号又は発行年月日) Cancer Causes Control. 2007 Feb;18(1):91-103.	
キーワード アルコール摂取、卵巣癌	
要 旨 目的： アルコール摂取が卵巣癌の危険性に影響をあたえるか否かはあきらかでない。そこで、様々な年齢におけるアルコール摂取と卵巣癌の危険性の関連を検討する。	
方法： The California Teachers Study cohort で 1995 年から 1996 年にベースラインアルコール飲酒調査をした 90,371 人（米国、女性、18-84 歳）を対象に 2003 年末まで追跡した。追跡期間中、253 人が卵巣癌と診断された。コックス比例ハザードモデルにて卵巣癌の調整相対危険度(RR)と 95%信頼区間(95%CI)を算出した。	
結果： ベースライン調査の前年年齢が 30-35 歳、18-22 歳での総アルコール、ビール、リカーの摂取は卵巣癌の危険性と関連を認めなかった。ベースライン時の一日あたりグラス一杯以上のワイン摂取者はワインを摂取しない対象者と比較して卵巣癌のリスクが上昇していた(RR = 1.57,95%CI 1.11-2.22)。これはベースライン時に閉経期を迎えエストロゲンホルモン単独療法中のものや社会的地位の高いものにおいて特に強く認めた。	
結論： アルコール摂取は卵巣癌の危険性に影響をあたえているようではなかった。アルコール以外のワイン含有物、あるいはワイン摂取と関連する何らかが卵巣癌の危険性と関連していると考えられた。	